

論ずるなら 腹を括ってからにしる

私の「反知性主義」的考察



森本あんり

国際基督教大学学務副学長 ● もりもと、あんり

これまでに受けたインタビュ
や対論で何度か繰り返してきたこ
とだが、わたしの「反知性主義」
(新潮社刊)は、近年の「反知性
主義」論ブームに乗ろうとして書
いたものではない。このテーマ
は、アメリカ研究の分野では目新
しいものではなく、わたし自身も
五年前の学会シンポジウムで取り
上げたことがある。自分としては
それまでに考えたり書いたりして
きたことをまとめ直しただけで、
偶々その刊行時期が別の著者たち
による反知性主義論と重なったま
である。

当然のことながら、アメリカ研
究で論じられてきた反知性主義に

し、自らも発展や改革の余地を失
ってしまふ。だから反知性主義
は、知性の刷新と進化をもたらす
のである。反知性主義の知性への
反対は、あくまでも「既存の知
性」への反対である。それは、知
性の蔑視や欠如であるよりは、
「新たな知性」の模索と開拓であ
る。

日本人は「異端」好きらしい。
ただしそれは、丸山眞男の言葉だ
が、居酒屋の隅で「どうせオレは
異端だから」みたいなオダをあげ
るだけの「片隅異端」である。正
統に挑戦するだけの胆力もなく、
表舞台では既存の正統と仲良く共
存してしまう。反知性主義を掲げ
るなら、無責任な万年野党の独り
言であってはならない。それは、
「学界の風雲児」などとマスコミ
にもはやされることでもなく、
そもそも異端を標榜することでは
なく、当該分野の内部で自分こそ

は特定の背景や系譜がある。わた
しはそれを歴史的に跡づけて説明
したが、この言葉を使う者は誰も
がそれを踏まえるべきだと主張し
たわけでもないし、ホフスタッタ
ーの議論をそのまま繰り返したわ
けでもない。「反知性主義」とい
う言葉が現代日本でまったく別の
意味をもって通用するようになって
たとしても、それはそれで当然の
ことであらう。

ただ、どんな意味で使うにして
も、わたしがこの言葉を使う人々
に知ってもらいたいのは、反知性
主義には何らかの覚悟や信念や確
信が必要だ、ということである。
何かに反対するには、それだけの

正統であり王道である、と正面切
って立ち上ることである。

そのような大胆な企てを支えて
くれるものは何か。アメリカ史で
は、それは宗教的確信であった。
反知性主義のうねりは、アメリカ
社会を繰り返し大きく変貌させて
きた平等主義的な信仰復興(リバ
イバル)の波となつて現れた。だ
から反知性主義の由来を尋ねるこ
とは、アメリカのキリスト教史を
追うことになるのである。

日本では「欧米」と一括りにさ
れるが、「欧」と「米」ではキリ
スト教の形態はまったく異なる。
アメリカは、何とかして旧世界た
るヨーロッパから知的にも宗教的
にも独立したいと願ひ続けた国で
ある。アメリカをキリスト教の
「本家」や「本場」のように考え
られては困る。そして神学は、ア
メリカ批判の根拠を手に入れるた
めに必須の学問である。アメリカ

腹の括り方があろう。戦を始める
なら、しつかり準備してからやら
ねばならない。知性のヘゲモニー
に対抗するには、それに負けない
だけの何かが必要である。

知性は権力と結びつきやすい。
そして、権力と結びついた知性は
固定化し、特権階級化し、自己永
続化を図る。反知性主義とは、こ
のような結びつきに楔を打ち込め
うとする努力である。したがって
それは、知性そのものや知性の本
来的な活動に対してではなく、そ
れが結びついた権力に対する反対
でなければならぬ。だから十分
な準備や覚悟が必要なのである。

知性が結びつく相手は、政治や
宗教の権力ばかりではない。学問
や芸術の分野にもあり、メディア
や芸能界にもある。人々はそれを
「伝統」「通説」「巨匠」「大家」と
呼ぶ。権力という鎧を身にまとつ
た知性は、まさにその故に硬化

のキリスト教を批判することなく
して、アメリカの中枢を批判する
ことはできないからである。

考えてみると、「学者・パリサ
イ人」という当時の知的・宗教的
権威にラディカルな否定を突きつ
けたのは、イエスであった。その
点ではお釈迦様も同じだったし、
性質は異なるがムハンマドもそう
である。宗教的な確信は、地上の
権力を怖れない。ものわかりのい
い仏教とか、飼ひ慣らされたキリ
スト教とか、牙の抜けたイスラム
教だけの世界には、「反知性主
義」は育たないのかもしれない。

森本あんり氏 昭和31(1956)
年、神奈川県生まれ。国際基督教大学人文
科学科卒。プリンストン神学大学院博士課
程修了。Ph.D. 国際基督教大教授などを
経て現職。「反知性主義—アメリカが生ん
だ「熱病」の正体」(新潮選書)など著書
多数。